

テンプス

2010年（平成22年）42号



願泉寺遠景（貝塚市民病院屋上より）

も く じ

願泉寺表門の半解体修理

目隠塀の調査

平成22年度貝塚市郷土資料展示室企画展のお知らせ
むかしの教科書展

孝恩寺の仏像 - 聖観音立像 -

古絵図をひも解く

古文書講座

貝塚市の風景～二色の浜周辺～



修理中の表門と目隠塀

願泉寺表門の半解体修理

平成 17 年 7 月より着工した重要文化財願泉寺本堂他 5 棟修理事業は、平成 22 年 12 月の事業終了に向けて各建物の修理工事が進められています。今回のテンプスでは、ほぼ完成に近い表門の半解体修理の現状を紹介します。

表門の半解体修理は屋根替え部分修理で、屋根瓦の葺き替えを中心に、4 本ある控柱の足下の飼い石（隙間を埋めるために入れる石）を取り替える工事などの修理工事が進められました（詳しくはテンプス第 38・39 号を参照）。平成 21 年 7 月におこなわれた揚げ屋工法による飼い石の交換後、損傷が著しい垂木（たるき）等の部材が新しいものに交換され、平成 22 年 2 月には屋根瓦を葺く直前まで修理が進みました。その後、平成 22 年 5 月末までに全ての屋根瓦が葺き直されました。



表門には約 7,000 枚の瓦が葺かれていますが、約半数の瓦が再利用されました。再利用の古い瓦は正面（御坊前通り）側に、今回新しく製作された瓦は背面（境内）側に葺かれています。このような葺き方をしたのは 2 つの理由があります。1 つは古い瓦を長持ちさせるためには環境がよい場所に葺いた方がよいということで、日当たりがよい正面側に古い瓦が葺かれました。2 つ目には道路が狭く屋根が目に入りにくい正面側よりも本堂から出て目に入る背面側に新しい瓦を葺いた方が見栄えがよいということで、背面側に新しく製作された瓦が葺かれました。瓦の葺き替えが終了したことで、修理中に表門を覆っていた素屋根も 6 月中に解体され、表門全体が姿をあらわし、現在は葺き直された瓦の状況を直接確認できるようになりました。



正面（御坊前通り）側から見た表門の屋根 ※左は全体、右は向かって左部分の拡大

屋根以外の部分では、屋根の妻側部分の破風（はふ）を保護する破風板の修理、正面の冠木長押（かぶきなげし）上に備えつけられた龍の彫刻や四周の虹梁（こうりょう）上の挟間板（さまいた）という部材に施された海馬（かいば）、麒麟（きりん）、獅子（しし）、飛龍（ひりゅう）といった空想上の動物の彫刻類、両側面に施された鬼の彫刻（彫刻類についてはテンプス第 40 号参照）の彩色、柱まわりの敷石の交換などがおこなわれました。



表門 破風部分



表門 獅子の彫刻



表門 鬼の彫刻



表門 敷石交換のようす

破風板は破風を風雨から保護するとともに荘厳さを演出するために取りつけられる部材で、表面は銅板で覆われ、その上には装飾的な金具が取り付けられています。今回の修理では、全体的には緑青（ろくしょう）色の塗装を、一部に漆箔（しっぽく：漆（うるし）の上に金箔をおく技法）をほどこしています。また、龍の彫刻は目玉・口の内部・宝珠に、その他の彫刻類は目玉部分にのみ彩色の痕跡が残っていたため、それらの部分に痕跡からわかった彩色が復元されました。敷石は一度すべてはがした後、傷んでいるものを取りかえ、新しいものに敷き直しました。今後は門扉や柱の足下を覆っていた金具などが取り付けられることで、表門全体の修理は終了します。

なお、平成 22 年 7 月現在、本堂は内部の彩色の復元作業、鐘楼は屋根の葺き替え作業、築地塀は壁塗り作業が同時進行で進められ、修理事業以前から解体されていた目隠塀の組立も始まりました。

願泉寺目隠塀の調査

願泉寺の修理も本堂、鐘楼、表門、築地塀と進み、目隠塀の修理をおこなっています。

目隠塀は、防御のための建物という説もありますが、表門から本堂・御影（親鸞聖人）が直接見えないように設けた塀と考えられる建物で、西本願寺などの一部の寺院に見られます。

願泉寺の目隠塀は、平成15年に事故で破損し、本堂の修理に先立ち基礎石を残して解体・収納していました。今回、目隠塀を復元する時に基礎石が沈み込んだり、ずれていることがわかり、基礎石のすえ直しの工事をするようになりました。

基礎石は地面から3～4cm出ているだけで石の厚みもあまりないと考えられていました。ところが石のすえ直し時に確認したところ、石の厚みは37cmもあることがわかりました。また、基礎石を組合せる部分の下からは、根石という、基礎石の沈みこみやずれを防いで安定させる石が8個見つかっています。基礎石周辺の地層を調べると、現在の境内より20cmぐらい地盤が低かったことがわかり、基礎石は当時の地面から20cm以上表に出ていたと考えられます。今回の調査からは、残念ながら目隠塀の部材に建築年代を記した墨書等はなく、建築年代を明らかにすることはできませんでした。今後も引き続き境内の状況を発掘調査等で明らかにしていく予定です。現在、本堂等の修理が進む中、境内の整備も進められており、完成が間近です。



目隠塀(解体・収納前)



基礎石の状況



根石の状況



基礎石、根石の断面

平成22年度貝塚市郷土資料展示室企画展のお知らせ むかしの教科書展

市民の皆さまから寄贈された明治・大正・昭和時代の小学校の教科書などを中心に、市内の学校関係の資料や写真などを展示します。

会 期：平成22年9月4日（土）～10月17日（日）
会 場：貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館2階）
開室時間：午前9時30分～午後5時
観 覧 料：無料
休 室 日：毎火曜日、9月20日（月・祝）、23日（木・祝）、30日（木）、10月11日（月・祝）



尋常小学読本 一
1903（明治36）年12月刊行

孝恩寺の仏像 - 聖観音立像 -

貝塚市木積（こつみ）の孝恩寺には、平安時代の制作で地方色豊かな 19 軀（く）の仏像が安置されており、うち 18 軀が重要文化財に指定されています。今回は、2 軀一組で重要文化財に指定されている聖観音（しょうかんのん）立像を紹介します。一般に観音菩薩とか観音さまと呼ばれる仏像の正式名称がこの聖観音です。

【重要文化財】木造 聖観音立像

時 代 平安時代前期

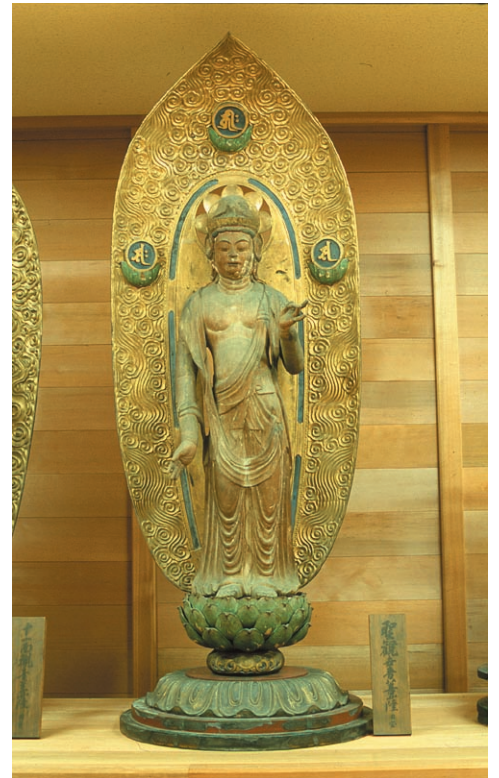
像 高 161.7cm

指定年月日 1913（大正2）年4月14日

本像は、頭頂から足元、右手および左臂（ひじ）を含めて、カヤと思われる一材で彫り出された像です。

肩から膝前にかかる天衣（てんね）という衣を1条のみわたす珍しい形式の菩薩像で、この形式は孝恩寺の多くの菩薩像に見られるものです。本来は彩色仕上げであったと思われる、頭部の天冠台（てんかんだい）には金箔が残っています。

肉付きの良い丸顔に小さな目鼻を配した穏やかな表情や厚めの柔らかな布の質感を出そうとしているかのような衣文（えもん）の表現などから、製作は9～10世紀と思われます。



【重要文化財】木造 聖観音立像

時 代 平安時代前期

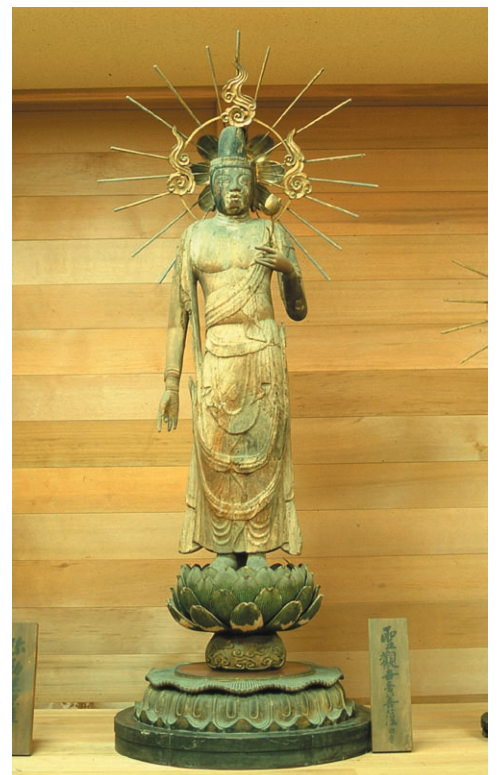
像 高 166.2cm

指定年月日 1913（大正2）年4月14日

本像は、頭頂から裾、両肩を含めてケヤキの一材で彫り出された像で、両肩から先はヒノキの別材を足しています。

孝恩寺の多くの菩薩像が肩から膝前にかかる天衣という衣を1条のみわたすのに対して、本像は一般的な2条をわたす形式としていることから、他の像とは伝来が異なる可能性があると考えられています。

やや長身ながら抑揚のない体つき、浅く形式的にあらわされた翻波式衣文（ほんばしきえもん：大波と小波を交互にあらわしたような木彫像の衣の表現）などから、製作は10世紀と思われます。



古絵図をひも解く

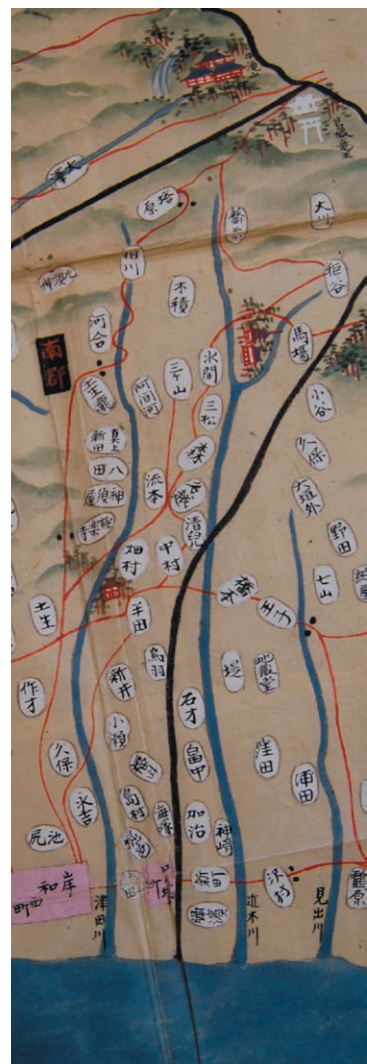
◆河摂泉（かせっせん）絵図



この絵図は作成時期についてははっきりしませんが、絵図の記載で大和川の付け替え以後であること、大坂の新田に天保山が描かれていないことなどから、18世紀初めから19世紀前半の間に作成されたものと考えられます。一般に摂津・河内・和泉の3国を指して「摂河泉」と言いますが、この絵図の表題には「河摂泉絵図」と書かれています。3国のうち、摂津は全て描かれている訳ではなく、西は尼崎、箕面の勝尾寺まで、いわゆる北摂のみが記載され、現在の大阪府と範囲がほぼ重なっています（ただし、池田市・豊能町・能勢町は見られません）。絵図の特徴として、①郡境に黒い線を引き、郡の名前は黒地に赤文字で記される。②町は四角く囲み桃色に塗られる。③村は小判型の中に書かれていて、摂津国は黄緑色・河内国は赤色・和泉国は白色に塗り分けられている。④街道は赤い線で、河川は青色で、山並みは緑色で描く。⑤大きな寺社はその建物を描く。といった点が挙げられます。彩色豊かな絵図ですが、テンプスで伝えられないのが残念です。（ホームページHTML版では、カラーでご覧になれます。）

要家文書「河摂泉絵図」
1765mm × 730mm

泉州、とくに現在の貝塚市周辺の絵図記載に注目すると、絵図の折り目で見づらいものの、浜側に「貝塚町」が桃色で塗られ、紀州街道が左右に貫いています。山側には熊野街道、浜手と山手を結ぶ水間街道などが赤い線で、南郡と日根郡の境が黒い線で描かれています。津田川・近木川・見出川の三つの川の流れが青く塗られています。寺社では半田に徳川將軍家を祀った海岸寺、水間に水間寺、葛城山に「葛城龍王」（＝高竈（たかおかみ）神社）が描かれています。このような彩色絵図が七人庄屋をつとめた要源太夫家にのこされた理由ははっきりしませんが、江戸時代に村々が連合し幕府へ訴え出た国訴（こくそ）をおこなう際、村々の伝達を円滑におこなうため用いられた可能性もうかがえる貴重な絵図です。



貝塚市周辺を拡大した部分図

古文書講座

◆「江戸時代のおふれ」

平成 22 年 5 月 29 日（土）から 5 回にわたり、「江戸時代のおふれ」と題して古文書講座を開催しました。

江戸時代において、幕府や藩などから一般の人びとに知らせる命令や取り決めである「おふれ」は、当時の人びとの暮らしに関わる部分が多く含まれ、自由を制限するものとされましたが、その一方で高くなりすぎた物価を抑制するなど、暮らしをまもる側面も持ち合わせていました。

講座では、貝塚市畠中であつて七人庄屋をつとめた要家の古文書を通して、「おふれ」が出された時代の背景やその目的などを明らかにしていきました。

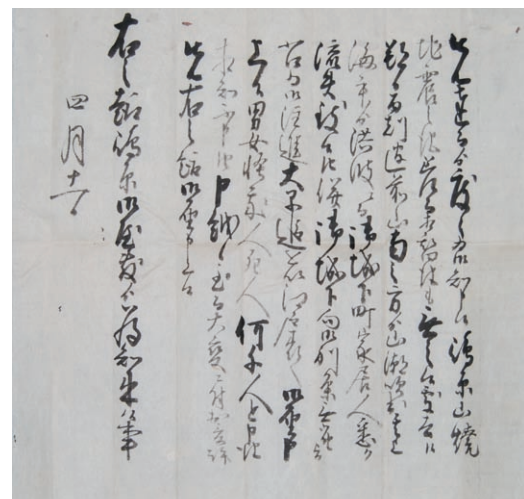
講座の参加者からは、「日記と記録などは個性のくずし字があり難解であつたが、今回の講座のような文章だと解読しやすく、よいと思う。今後も色々な資料での講座をお願いします」といった感想のほか、今後取り上げてほしいテーマとして「武士の日常生活」、「織田豊臣期の貝塚を中心とした戦い」などの希望が寄せられました。



◆古文書講座（第 34 回）開催のお知らせ

「江戸時代の天災—地震・雷・火事—」

江戸時代は、現代と比べて天災に対する備えは十分ではありません。地震の時の対応や雷・火事などの被害情報をはじめ、災害にまつわる様々な記録をテキストに、当時の人びとの対応や幕府・藩などの動向を明らかにしていきます。



日 時：平成 22 年 9 月 25 日—第 1 回、10 月 2 日—第 2 回、
10 月 16 日—第 3 回、10 月 23 日—第 4 回、
10 月 30 日—第 5 回
いずれも土曜日午後 2 時～4 時 30 分

場 所：貝塚市民図書館 2 階視聴覚室

申 込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・E メール・FAX・電話いずれかで、下記まで事前にお申込みください。

連絡先 〒 597-8585 貝塚市畠中 1 丁目 12-1（貝塚市民図書館 2 階） 貝塚市郷土資料室
TEL 072 (433) 7205 / FAX 072 (433) 7107
E mail : shiryoushitsu @ city.kaizuka.lg.jp

約 200 年前の 1792（寛政 4）年 4 月 1 日に長崎県島原地方を襲った地震を伝える史料。島原城下町は背後にあった眉山の崩壊（＝「山潮」）と、大津波（＝「洪波」）によって流失したとあります。「島原大変」と呼ばれ、死者 1 万 5000 人を数えた大災害の様子を伝えています。

貝塚市の風景

～二色の浜周辺～



昭和初期の二色の浜の様子



現在の二色の浜の様子

日ごろ目にする何気ないまちの風景も、いろいろな部分で日々変化しています。今回は二色の浜周辺を紹介します。

昭和初期に海水浴場として整備された二色の浜では、砂浜と松林との間に1994（平成6）年にできた阪神高速湾岸線の高架が通り、帆船マストのモニュメントが目印のレストハウスができるなど、風景が大きく変貌しています。夏になると今も昔も変わらず、海水浴を楽しむ多くの人たちでにぎわいを見せます。

昭和30年ごろの八品神社周辺では、神社の周りに田畑が広がっていました。現在では、田畑が少し残りつつも、多くの住宅が立ち並び、大きく変化しています。



昭和30年ごろの八品神社周辺の風景



現在の八品神社周辺の風景

かいづか文化財だよりテンプス 42号

平成22年8月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷：(株)帯谷印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：48.09円

広告募集中

50mm × 80mm（最終ページ） 1枠

50mm × 175mm（2～7ページ） 6枠

詳しくは社会教育課文化財担当までお問合せください。

